

CONTENTS COMBAT

2012.Nov.
No.440

11

Cover Design
favorite graphics(tamao ito),
Cover Photo
Yoshihisa Kumagai(WPP)
©WORLD PHOTO PRESS 2012



【第1特集／ミリタリー】

040 パッチ大特集

040 パッチマニア

●解説:菊月俊之 ●写真:熊谷義久(WPP)、宮坂政邦(WPP)

050 モダン ミリタリー パッチ カルチャー

●Text by fujiwara ●Photo by fujiwara, Yoshihisa Kumagai (WPP)



059 戦争ゴッコ大作戦 THE WAR & PEACE SHOW 2012

●Report & Photos by Sam Motojima / Jimmy Numata

085 Militaria Roundup! US. M1944/45 コンバット・バック&カーゴ・バッグ Part.1

●解説:菊月俊之 ●写真:熊谷義久(WPP)/宮坂政邦(WPP)

130 The Equipments of the U.S. Force [現用米軍装備カタログ] 第95回

海兵隊最新装備第2弾 FILBEバックパックシステム徹底解剖

●解説:松原隆(高知ボンバーズ) ●撮影:TARO/山崎 学

016 【第2特集／トイガン】

東京マルイ

固定スライドガスガン・シリーズ

●Photos&Text by Taku

022 WESTERN ARMS COMBAT COMMANDER LOVELESS CUSTOM Ver.2012

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

026 WESTERN ARMS SCREEN PROPERTY SERIES

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY



Photo : U.S. Army



004 NEW GENERATION STYLER

●by fujiwara

015 シネマティック・アクション・ゲーム MAX PAYNE3

036 にっぽんのちからこぶ

月刊・自衛隊「富士総合火力演習」

●取材:菊池雅之

066 COMBAT RECOMMEND Movie アイアン・スカイ

●解説:狩野健一郎

068 GOODS & ACCESSORY

077 GAME OVER THE TOP!

●文:斉藤直樹

080 サーいじ技研スピンオフ企画

HopEストラップ&キャップホルダー

●写真と文/ 織本知之

082 トイガンニュース

082 マルゼン イングラムM11 フルセット

084 CAW コルト・ウッズマン・マッチターゲット

098 サープラスいじり技術研究所

●写真・文:織本知之

138 世界の兵士図鑑

陸上自衛隊にみる階級章および各種徽章類

●イラスト・解説:坂本 明

142 PRESENT

184 S&Grafグッズ

186 中田商店グッズ

097 水陸両用車 AAV ●文:菊池雅之

100 物欲ワンホール

Round 13: カップガン “越後屋” カスタム

レア・ミリタリー・テクノロジー

104 ミリタリー雑学講座

108 ミリタリー・コレクション

112 幻妖中隊 #mod.15 ●by FUJIWARA

114 ビバ! ナイフ

116 ザ・ビクトリーショー

117 A STITCH IN TIME

118 MGストーリー ～小峯隆生のできるまで～

119 蛙のゆびさき(中山 蛙)

122 トイガンズジャンクション

124 バックナンバーリスト

161 読んで覚える TakuのHOW TO Shooting 射撃のススメ

162 帰ってきた 狩野健一郎の [監督、そこにおっぱいは必要ですか!]

164 アメリカGUN事情 Guns Talk from US

166 米軍医療演習「メディック2012」 ●取材:菊池雅之

168 狩野健一郎のシネマ放浪記

170 狩野健一郎の新作DVD紹介

171 コンバットマガジン・インフォメーション・センター

172 読者プレゼント応募方法

175 編集後記



東京マルイ

Photos & Text by Taku
東京マルイ : <http://www.tokyo-marui.co.jp>

固定スライド ガスガン・ シリーズ



東京マルイの
ロングセラーモデルが
装いも新たに登場!!

SCREEN PROPERTY SERIES



HARDBALLER T1 VER.2012



ハードボーラー 〈T1 Ver.2012〉

- 全長:267mm
- 銃身長:138mm
- 重量:1,030g
- 装弾数:21+ 1 発
- 予定価格:¥31,500
- ※10月WA渋谷店限定発売予定

コンパクト・シューティングの発展と共に近代化されたM1911A1シリーズ'70。現在もこの基本形が引き継がれている。

ガバメント系初の オール・ステンレス・カスタム

ガバメント・バリエーションとして、日本では根強い人気を誇る“ハードボーラー”。見慣れたロング・スライドの7インチ・モデルの他、スタンダード・サイズの5インチや、スーパー・ロング・スライドの10インチ、12インチなどのバリエーションが作られていた。1977年に創設されたIMI（アルカディア・マシン&ツール）が、スタートと同時に発売したのがこのシリーズで、当初は、.45カートリッジの中でも、230グレインのフルメタルジャケット（.45ハードボール）以外は相性がよくなかったことから、“ハードボーラー”の名称が付けられたそうだ。

ロングスライドの迫力ある外観に加え、スライドとフレームをステンレス・スチール製にしていたことも、ハードボーラーが注目された理由のひとつ。現在でこそオールステンレスは珍しくなくなったが、1997年当時はまだ含有元素の関係から、オールステンレスで製作されたセミオートではこのハードボーラーが初。その後デトニクスなどが、オールステンレス製のガバメント・クロンをリリースした。

初期のハードボーラーは、素材に問題があったのか、スライドの変形などが多く、あまり人気は出なかったという。その後、フィードバック・ランプの改良、素材の発達などでほとんどのトラブルが解消されたそう。フィードバックランプが改良されてからは、ハードボール以外のカートリッジも適合するようになったが、残念ながら性能の方はイマイチで、1990年代以降に急増した数多くのクローン・ガバメントに対抗することができなかったらしい。往年の人気モデル“ホグ・ロングスライド”より、さらに1インチ長いスライドは、スマートでとてもカッコイイのだが、実用性で勝負するのは難しかったのだろう。特に1990年代後半はタクティカル系カスタムの時代に入ったので、ロング・スライドは趣味のシューティングやコレクション的な需要しか生まなくなった。迫力とスマートさを最大の特徴にしたハードボーラーだったが、逆にそれが伸び悩む原因になってしまったのだから皮肉というほかない。

アメリカでは振るわなかったハードボーラーだが、日本では根強い人気を誇るガバメント系カスタムのひとつになっている。実射性能（実弾の）などまったく関係ないトイガンであることがひとつの理由だと思うが、それ以上に大きな理由は、ハードボ



ーラーに投影される強烈なキャラクターだ。“サイバードアイン101型/T-800”。そう1984年に公開された『ターミネーター』に登場して強い印象を残したのが、ハードボーラーだ。

2029年から1984年にタイムスリップした殺人マシン“ターミネーター”が、ロサンゼルス「アラモ銃砲店」で、AR18、スパス12、ウーキーSMGとともに、レーザーサイト付のハードボーラーを店員に指示す

パッチマニア

THE PATCH MANIA

本来は継ぎを意味する“パッチ”という単語だが、ミリタリーの分野ではユニフォームに着用する布製の徽章を意味する。徽章としてのパッチは各国軍で使用されているが、バリエーションの多さではアメリカ軍がトップクラス。現在は低視認性の“サブデュート”が広く使用されているが、ここではパッチの王道であるフルカラーのパッチをメインに、その魅力を探っていこう。

●解説：菊月俊之 ●写真：熊谷義久(WPP) 宮坂政邦(WPP)



第2次世界大戦後、日本占領軍として進駐したアメリカ太平洋陸軍総司令部 (GHQ / AFPAC) のパッチ。本来は1942年4月に編成された南西太平洋軍総司令部 (GHQ / SWPA) のもので、'45年4月の組織改編後はGHQ / AFPACのパッチとして使用され続けられた。写真のパッチは戦後に日本で製作されたもので、上部のスクロール（巻物）上のタブは総司令部直属の儀仗部隊が適用したもの。

素晴らしいミリタリー・パッチの世界

ミリタリー・コレクションの対象にはさまざまなアイテムが存在するが、その中でも数多くの種類を持つのが各種インシグニア（徽章）だ。ひと口に徽章といっても、目的や用途によって細分化されており、その実態はかなり複雑だ。それらインシグニアの中でポピュラーな存在が“パッチ（Patch）”と呼ばれる布製インシグニアで、ファッションの分野でも広く浸透している。“パッチ”は本来「当てもの（継ぎ）」の意味だが、ミリタリーの分野では「袖に着用する、所属を示す小さな布製バッジ」を指す。“バッジ（Badge）”という金属製を連想してしまうが、こ

れは「階級・所属・名誉等を表わす徽章」の意味で、特に材質は決まっていない。パッチのデザインは国によってさまざまだが、カラフルでデザインのバリエーションに富むのはやはりアメリカ軍で、複製品を含め比較的入手が容易だ。パッチの中でもっともポピュラーで種類が多いのは“ショルダー・パッチ（Shoulder Patch）”と呼ばれる部隊章だが、正式名称はショルダー・スリーブ・インシグニア（Shoulder Sleeve Insignia）で“SSI”と略称される。ちなみに現在SSIは部隊の規模によって分類されており、現行の陸軍規定670-1では

陸軍メイジャー・コマンド（MACOMS）、軍、軍団、師団、独立旅団、独立連隊など、全部で11のジャンルに分類されている。アメリカ軍ではベトナム戦争（1962～75年）を境に“サブデュード（Subdeadeude）”と呼ばれるオリーブ・グリーン地に黒で刺繍した低視認性パッチを戦闘服用に導入。さらに下士官階級章も金属製のバッジに変更されるなど、「地味」な存在となった。本稿ではパッチがサブデュード化される以前の「黄金時代」をメインに、その歴史とデザインの背景、着用方法を紹介していこう。

パッチの起源とその発展

HISTORY OF MILITARY PATCHES

1863年

軍団バッジ

最初の部隊パッチが登場

軍団バッジは通常“ケピ（Kepi）”と呼ばれる軍帽のクラウン部に着用された。バッジはすべての階級が着用したが、将校は金属製を着用することが多かった。図版は1863年当時の北軍兵士を描いたもので、右側の軍曹のケピ帽に付いている軍団バッジは第2軍団第1師団の所属を示す。(U.S. Army)

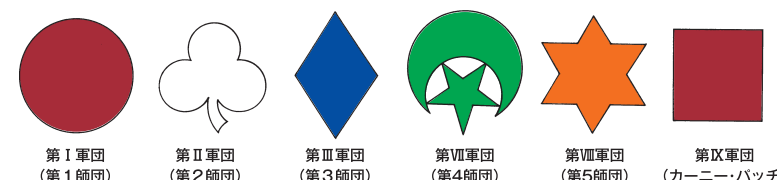


アメリカ陸軍が使用した最初の部隊章はメキシコ戦争（1846～48年）中に使用されたもので、乗馬小銃連隊（Mounted Rifles Regiment）がラッパの徽章をユニフォームの袖に着用したといわれる。しかし、所属部隊を示すパッチが本格使用されるのは南北戦争中（1861～65年）のことで、その最初のものは1862年6月28日に連邦軍（北軍）のポトマック軍所属の第3軍団第3師団が採用している。これは司令官のフィル・カーニー少将が指揮下の将校を識別するために導入したもので、帽子に2インチ（5cm）平方の赤いフランネル布地を縫い付けた。そして'63年にはポトマック軍で隷下軍団を識別する徽章がデザインされ、3月21日にジョー・フーカー少将によって導入されている。

この徽章は“軍団バッジ（Corps Badges）”と呼ばれたが、同時に軍団の隷下師団を色で識別するようになっており、第1師団が赤、第2師団が白、第3師団が青、第4師団が緑、そして第5師団がオレンジを使用。着用位置は各軍団に任されたが、帽子に着用するのが一般的で、中には左胸に着用されることもあった。軍団バッジはその後ポトマック軍以外でも導入されるが、戦争終結によって使用は中止されている。軍団バッジが復活するのは1998年の米西戦争時だが、この際に使用されたものは南北戦争当時とはデザインが異なった。

軍団バッジ CORPS BADGES

アメリカ陸軍が最初に使用した部隊バッジは南北戦争中の軍団バッジで、部隊識別のほかに将兵の士気向上も目的とされている。最初の部隊バッジはフィル・カーニー少将が導入した赤い正方形のフランネル製バッジで、1863年に軍団バッジが導入された際には第9軍団がこれを使用。一般には“カーニー・バッジ（Kearney Patch）”と呼ばれた。図は南北戦争当時に使用された軍団バッジ（一部）。





2012

戦争「大」作戦

●Report & Photos by Sam Motojima / Jimmy Numata



THE WAR & PEACE SHOW 2012

雑誌のレポートには毎年恒例の記事というのがある。たとえば何処のミリタリー雑誌でも必ず行なう自衛隊の「総合火力演習」のレポートなどは定番であろう。その他にも定例イベントもののレポートは多々あるのだが、筆者はできることならば、英国の「The War & Peace Show」を定番にしたいと考え、毎年参加しては本誌にコツコツと掲載しているのである。なぜならばこのイベントこそ世界最大のミリタリー&GUNマニアのための総合イベントであり、まさに「コンバットマガジン」のライブ版といっても過言でないと考えているからである。